

土器川水系河川整備基本方針の変更について ＜参考資料＞

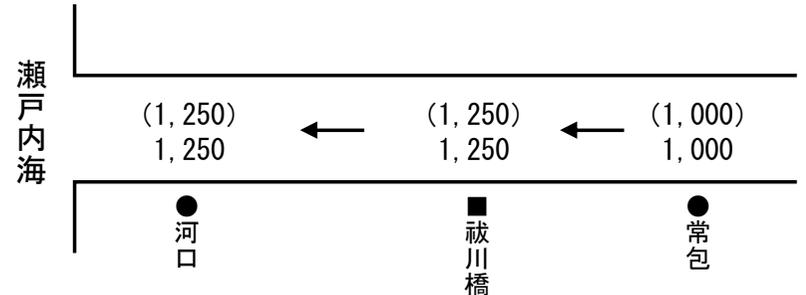
令和 7 年 7 月 1 7 日
国土交通省 水管理・国土保全局

①流域の概要

○ 現行の河川整備計画（大臣管理区間：平成24年9月策定）の目標流量は、戦後最大洪水である平成16年10月洪水と同規模の洪水を流下させるとともに、上下流の治水安全度バランスを確保するものとして、祓川橋地点で1,250m³/s（河道配分流量1,250m³/s）と設定している。

目標流量

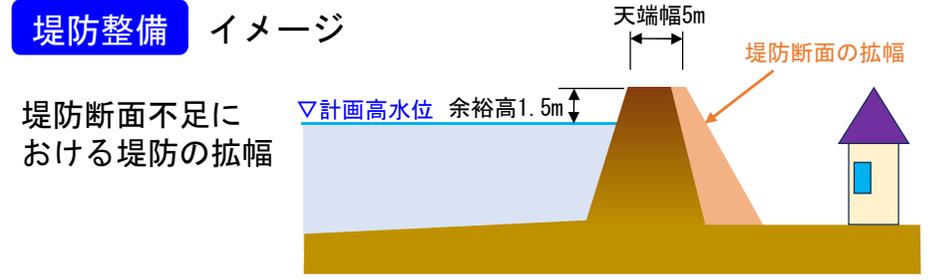
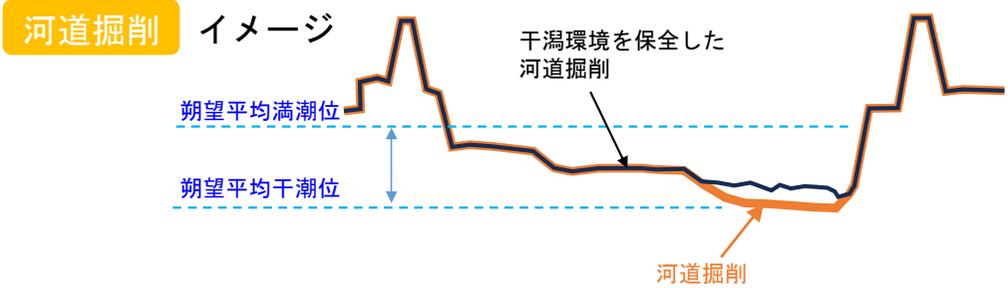
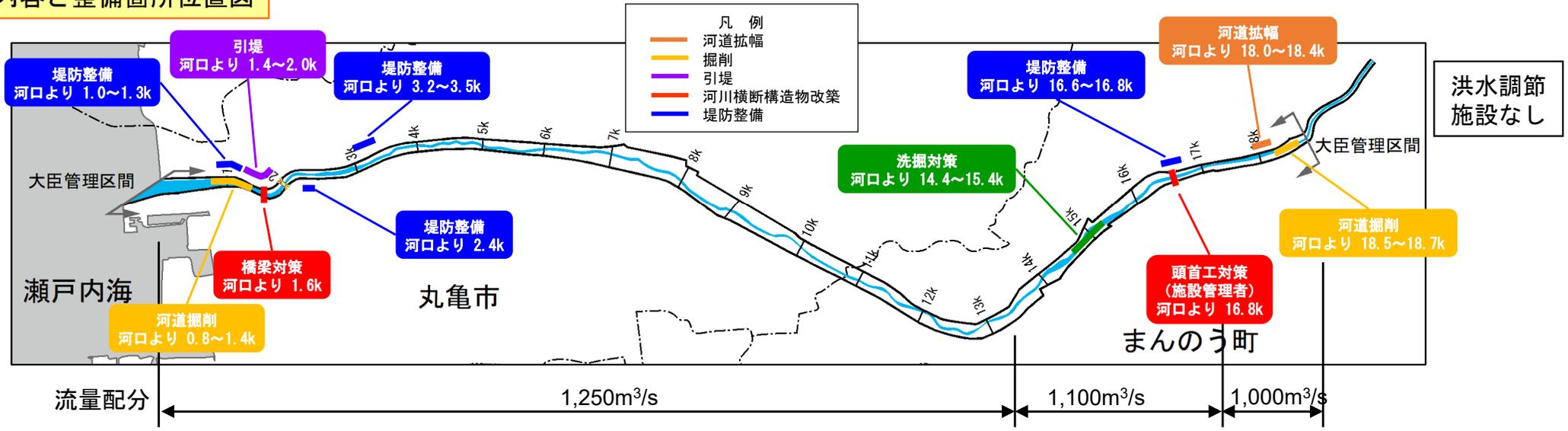
（目標流量） 単位：m³/s
 河道配分流量 単位：m³/s
 ■：基準地点
 ●：主要な地点



流量配分模式図

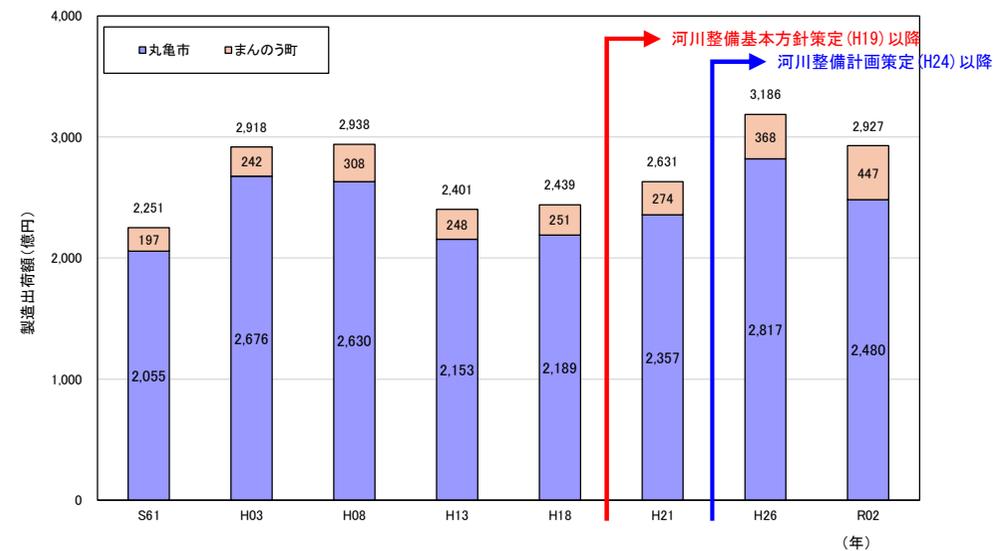
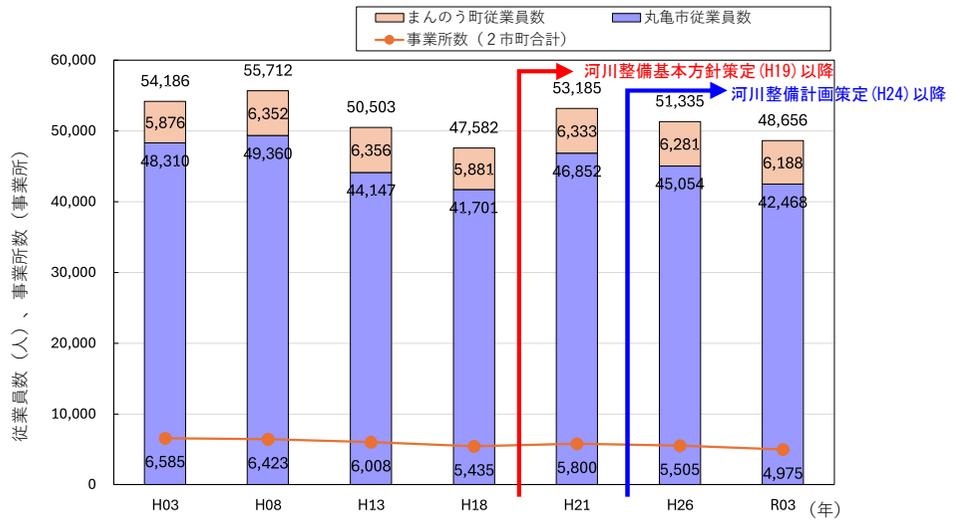
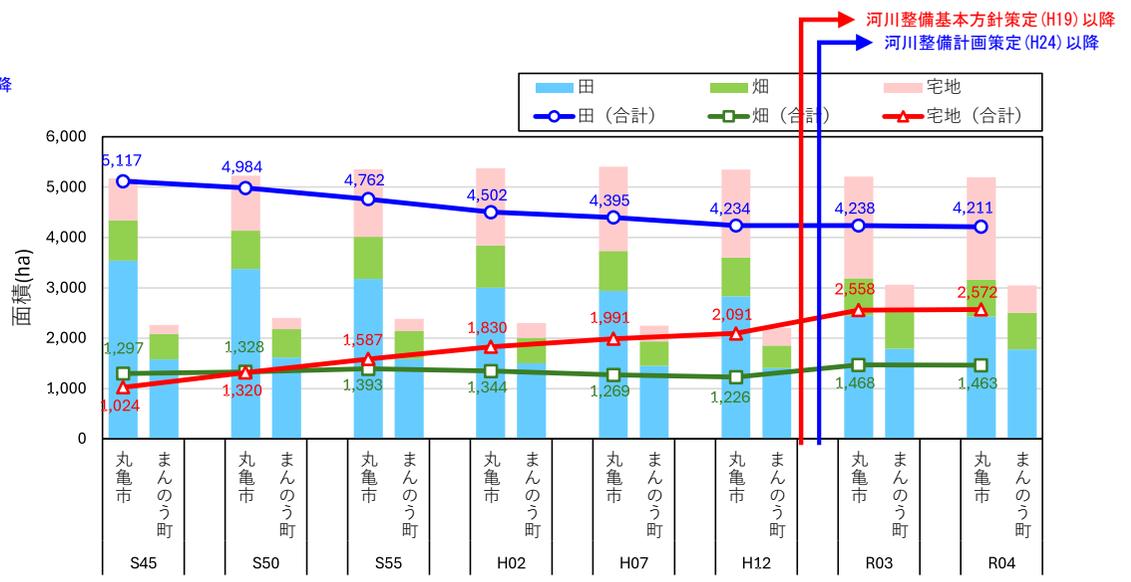
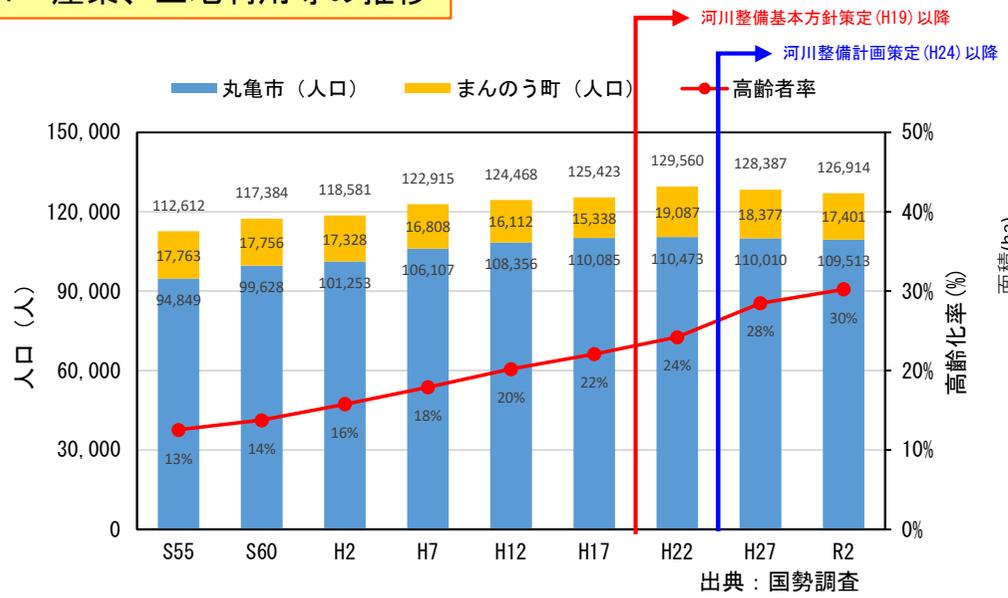
土器川 (祓川橋地点)	
対象洪水	平成16年10月洪水
目標流量	1,250m ³ /s
河道配分流量	1,250m ³ /s

整備内容と整備箇所位置図



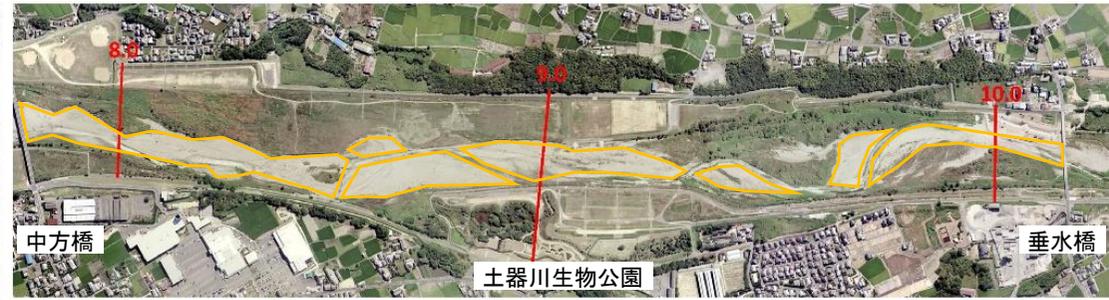
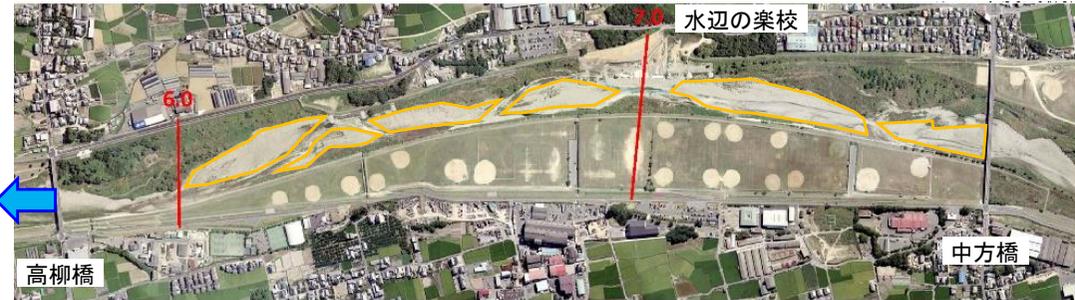
○人口（丸亀市・まんのう町）は近年ほぼ横ばいであるが、高齢化率は増加傾向である。
 ○宅地面積は増加傾向で、水田面積が減少傾向となっており、流域の資産は増加傾向である。
 ○製造品出荷額は、近年3,000億円程度を維持しているが、事業所数・従業員数が減少傾向となっている。

人口・産業、土地利用等の推移

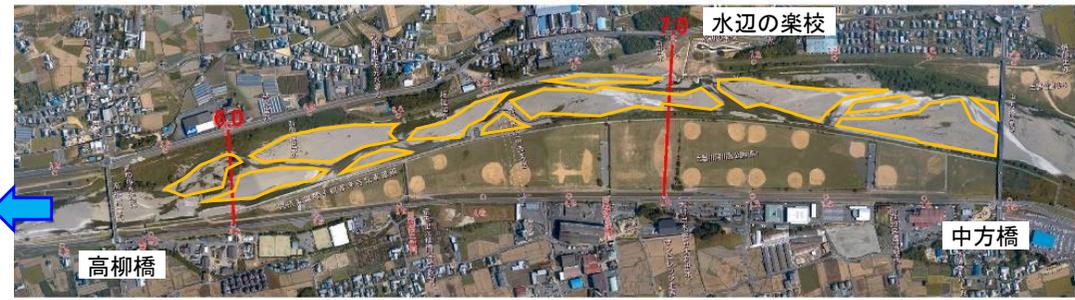


○土器川下流部は、出水後においてもカワヂシャやミゾコウジュなどの重要種が生育し、イカルチドリの繁殖場となっている礫河原が保たれている。

平成14年撮影



平成17年撮影



平成16年10月台風第23号洪水（祓川橋：約1,040m³/s）



イカルチドリ



ツグミ



カワヂシャ



ミゾコウジュ



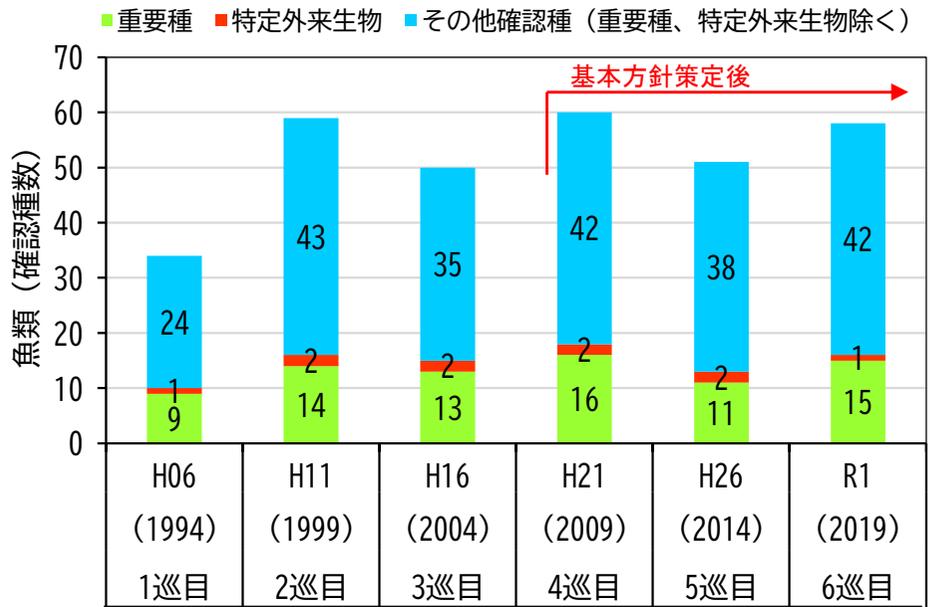
瀬切れ時の孤立淵（たまり）

- 礫河原はイカルチドリの繁殖場となっている。また、砂州上の草地にはツグミなどが確認されている。
- 礫河原の水際の湿生地にはカワヂシャやミゾコウジュなどの重要種が縦断的に広く生育している。
- 瀬切れ時でも孤立淵（たまり）が形成され、魚類等が生息する貴重な水域が維持されている。
- 急流河川で、出水のたびに河床が攪拌される河道特性のため、出水前後で河床形状に変化があるものの、礫河原の環境は維持されている。

⑤河川環境・河川利用についての検討

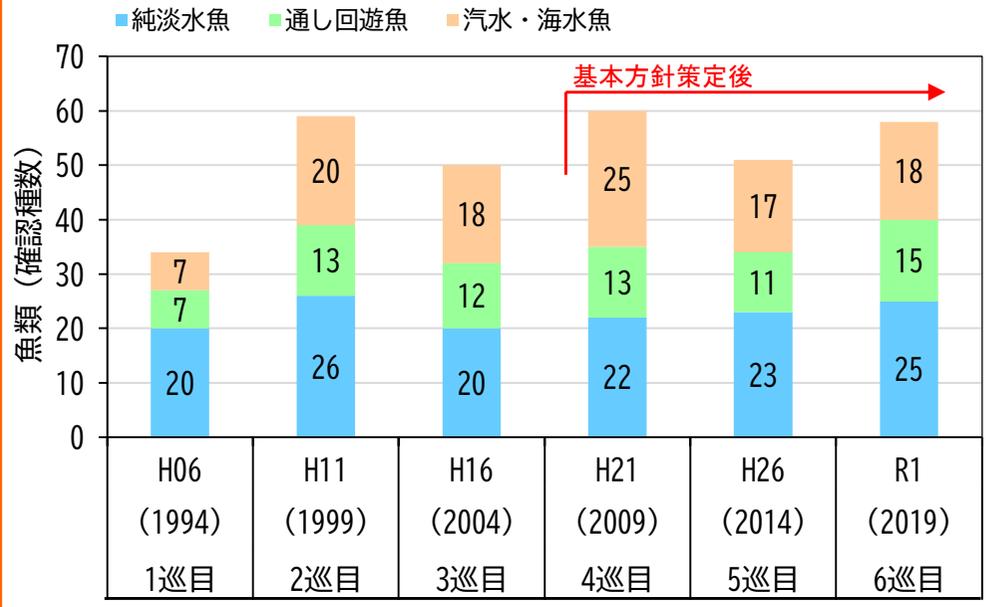
○ 魚類について、重要種・特定外来種等で分類した場合と回遊型による分類を実施。
 ○ 基本方針策定後、若干の増減はあるものの、各分類の種数に経年的に大きな変化は見られず、分類方法による傾向の差異も見られない。

魚類相の変遷



注) 経年的に調査を実施している5地区(土土香1(蓬莱橋)、丸亀大橋(補足)、垂水橋(補足)、土土香2(祓川橋)、土土香3(常包橋))の調査結果を用いた。ただしH6(1994)年1巡目のみ、丸亀大橋(補足)での調査を実施していない。

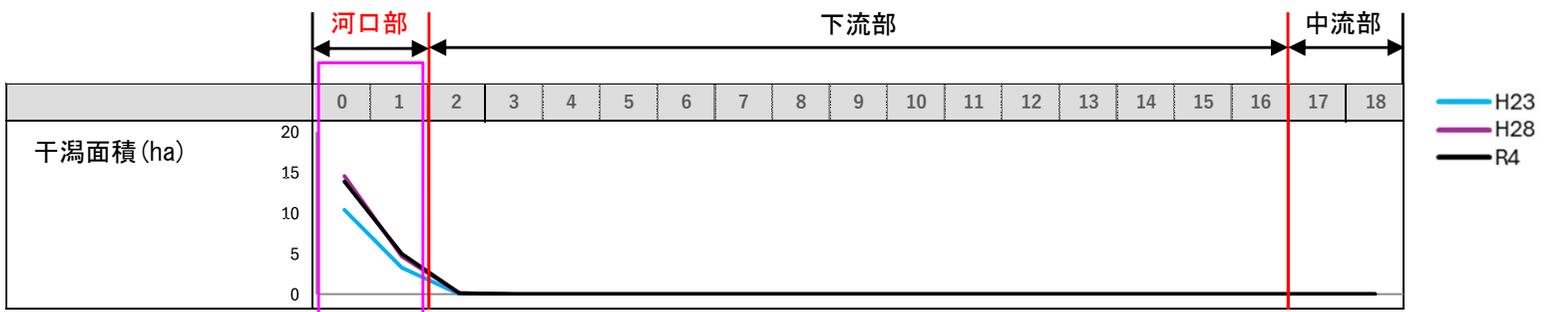
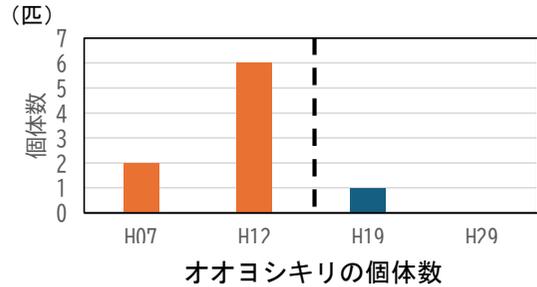
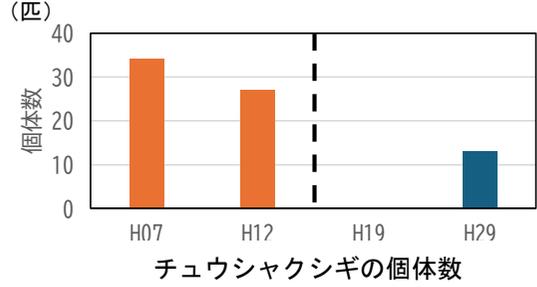
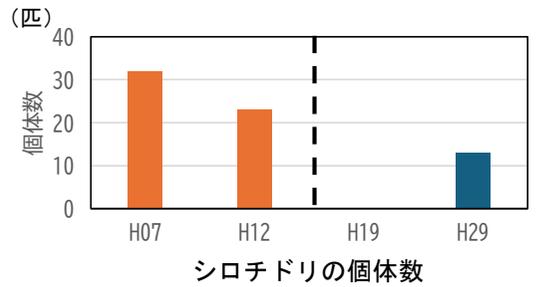
回遊型による変遷



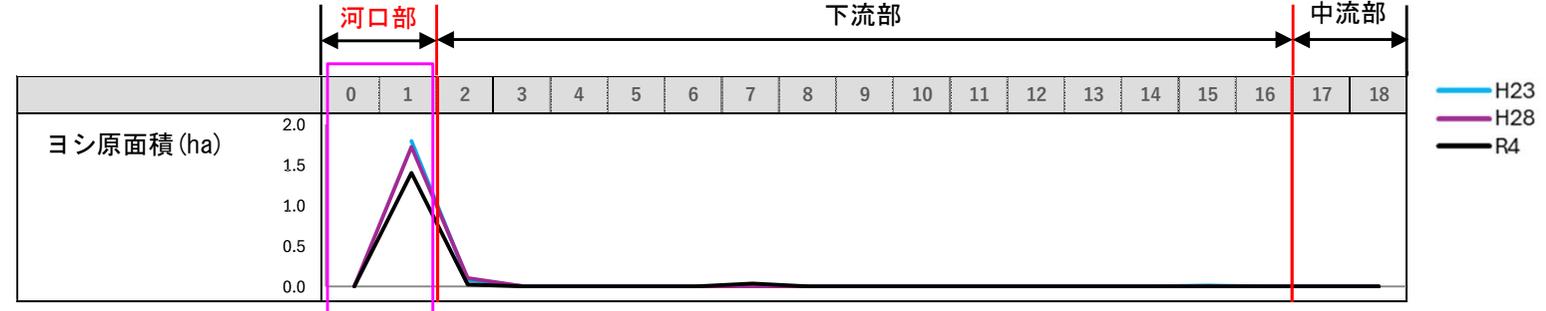
注) 経年的に調査を実施している5地区(土土香1(蓬莱橋)、丸亀大橋(補足)、垂水橋(補足)、土土香2(祓川橋)、土土香3(常包橋))の調査結果を用いた。ただしH6(1994)年1巡目のみ、丸亀大橋(補足)での調査を実施していない。

○土器川河口部（0.0k～2.0k）では、干潟面積に大きな変化がなく、干潟を主な生息、繁殖場とするシロチドリとチュウシャクシギの個体数は平成19年は確認されていないが、横ばい傾向である。
 ○オオヨシキリの個体数は、平成29年に確認されていないが、河川工事に伴うヨシ原の移植の影響と推察される。

土器川河口部に生息する種と干潟、ヨシ原面積の経年変化



河口部(0.0k～2.0k)
 ※干潟の面積に大きな変化は見られない。

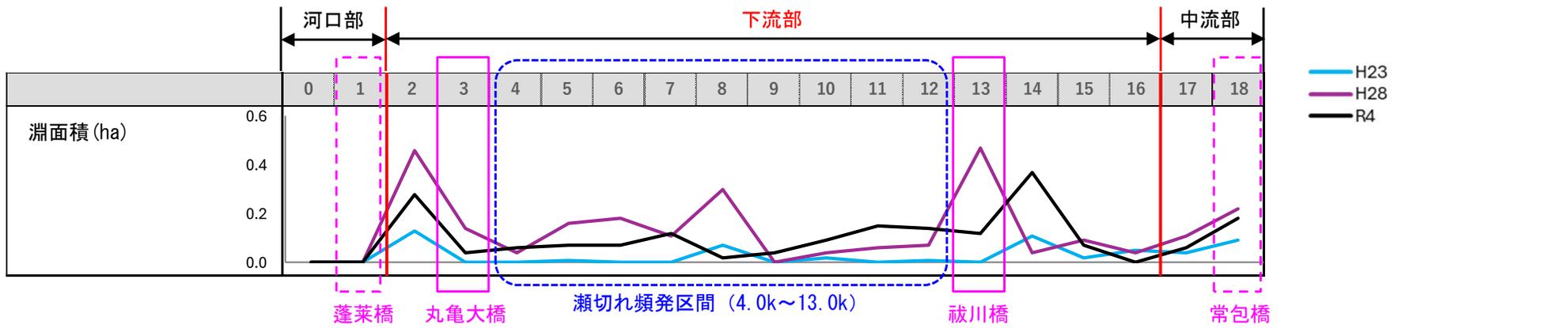
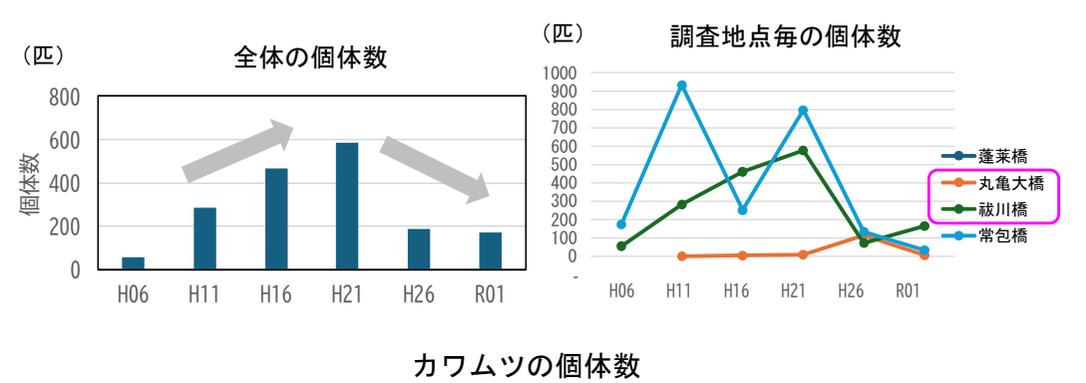
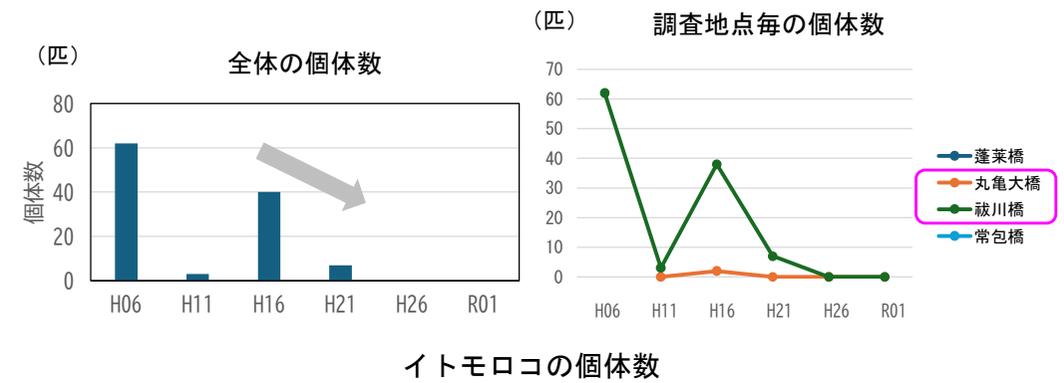


河口部(0.0k～2.0k)
 ※ヨシ原の面積は令和4年度の河川工事に伴う移植により減少傾向である。

※鳥類の河川水辺の国勢調査のマニュアル改定に伴い、H19以降は調査方法が異なる。
 ※河川水辺の国勢調査、河川環境管理シートより、直近10年間の変化を整理。
 ※土器川河口部の鳥類の確認数は、河川水辺の国勢調査における0.0k～2.0k内の調査地区で確認された個体数の合計。

○土器川下流部（2.0k~17.0k）では、古くから瀬切れが頻発する区間で、瀬から淵の連続した水域の確保が困難な河川特性となっており、淵の面積に大きな変化はないものの、祓川橋地点のイトモロコの個体数は減少傾向であり、丸亀大橋地点では平成26年以降に確認されていない。
 ○カワムツの個体数は、祓川橋地点では減少傾向である。

土器川下流部に生息する種と淵面積の経年変化



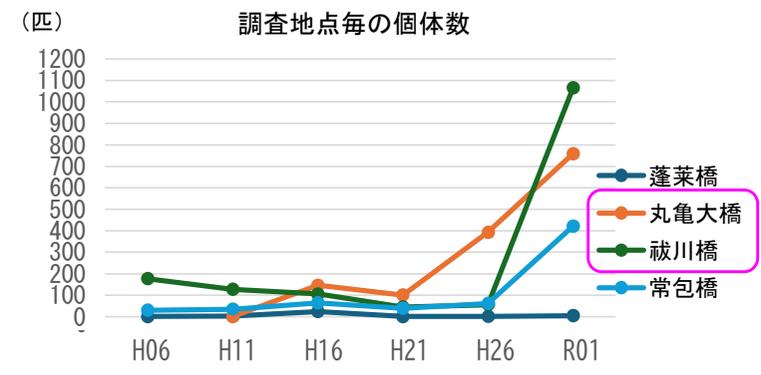
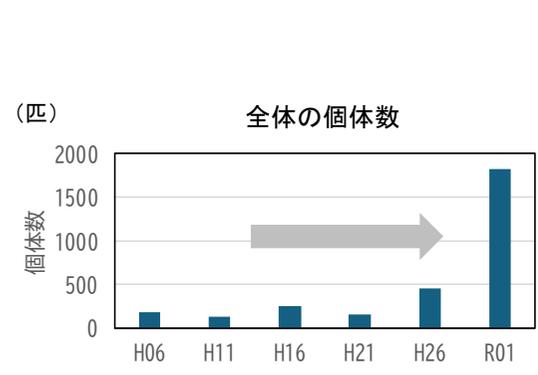
※淵の面積は、瀬切れ頻発区間において、大きな変化は見られない。

※河川水辺の国勢調査、河川環境管理シートより、直近10年間の変化を整理。

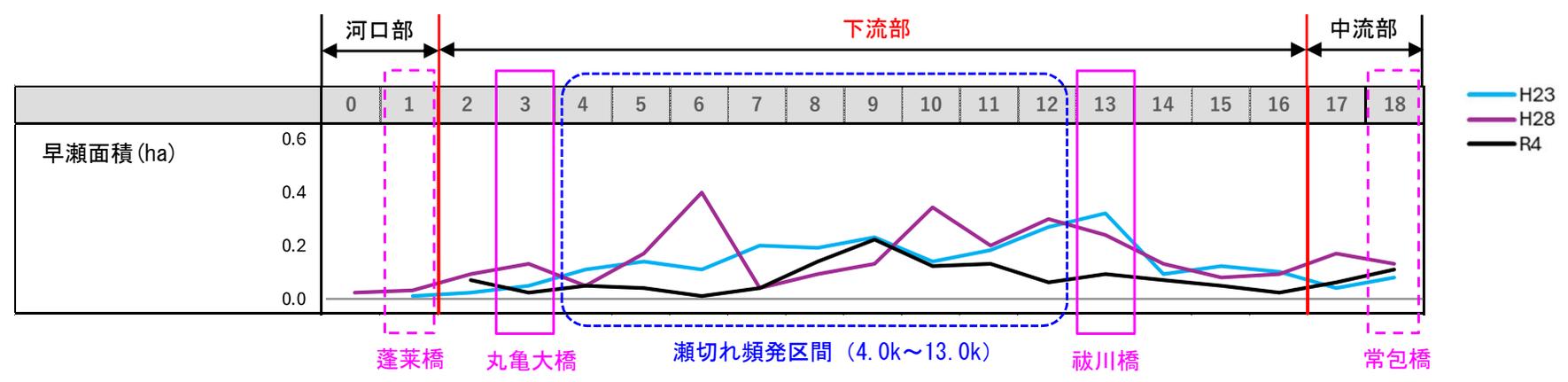
※土器川下流部の魚類の確認数は、河川水辺の国勢調査における丸亀大橋地点、祓川橋地点で確認された個体数の合計。

○土器川下流部（2.0k～17.0k）では、古くから瀬切れが頻発する区間で、瀬から淵の連続した水域の確保が困難な河川特性となっており、早瀬の面積は下流部全体で減少傾向であるものの、オイカワの個体数が令和元年に突出して多いが概ね横ばい傾向である。

土器川下流部に生息する種と早瀬面積の経年変化



オイカワの個体数



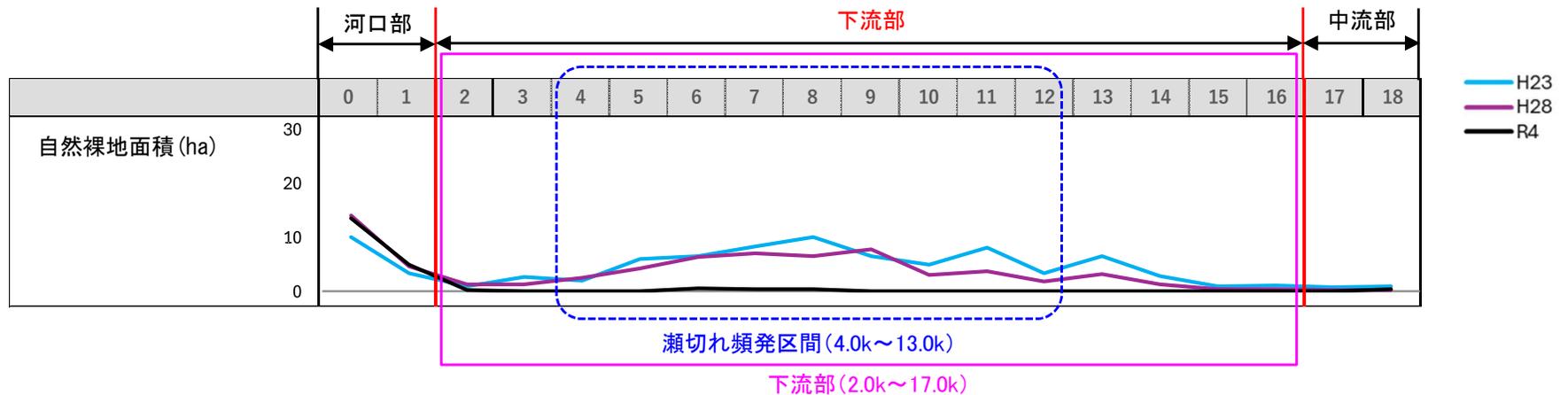
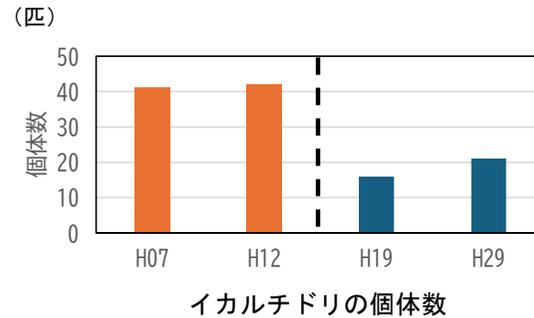
※早瀬の面積は、下流部全体（2.0k～17.0k）で減少傾向である。

※河川水辺の国勢調査、河川環境管理シートより、直近10年間の変化を整理。

※土器川下流部の魚類の確認数は、河川水辺の国勢調査における丸亀大橋地点、祓川橋地点で確認された個体数の合計。

○土器川下流部（2.0k～17.0k）では、古くから瀬切れが頻発する一方で、河床に礫河原が広がる区間であるが、近年、河床を攪拌する大きな洪水が発生していないため、自然裸地の草地化が進行し平成28年以降に自然裸地が減少傾向になっているものの、礫河原を繁殖場とするイカルチドリの個体数は横ばい傾向である。

土器川下流部に生息する種と自然裸地面積の経年変化



※自然裸地の面積はH28以降で5.0k～8.0k区間を除き減少が見られる。

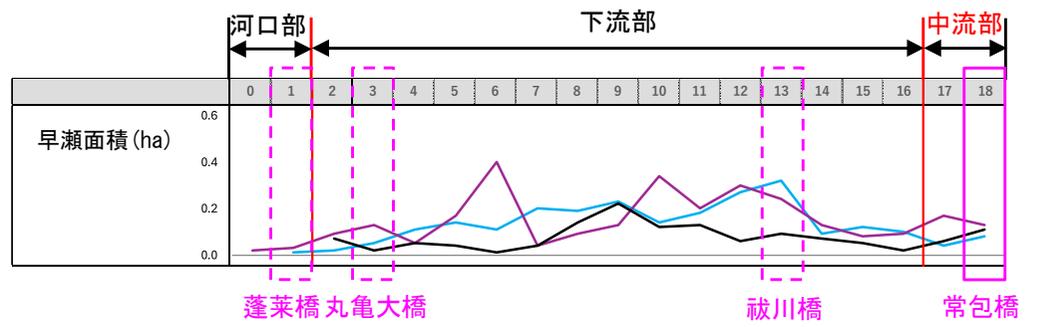
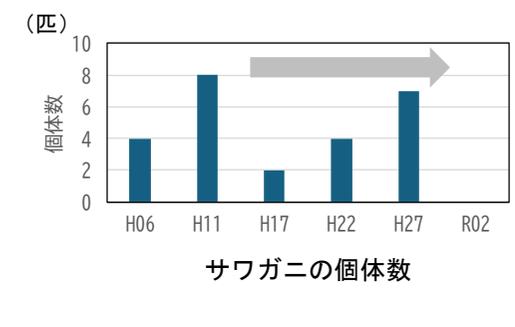
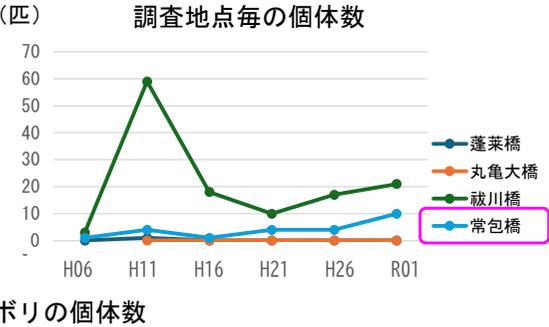
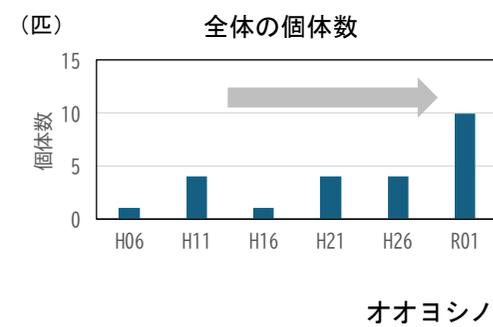
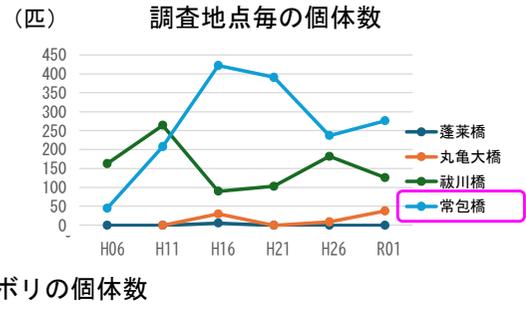
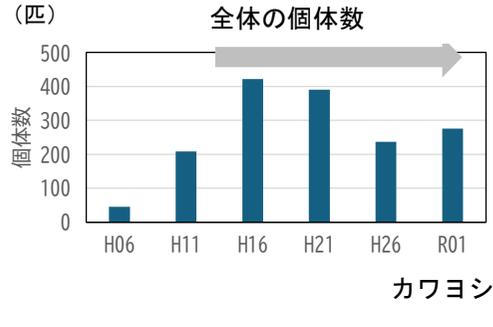
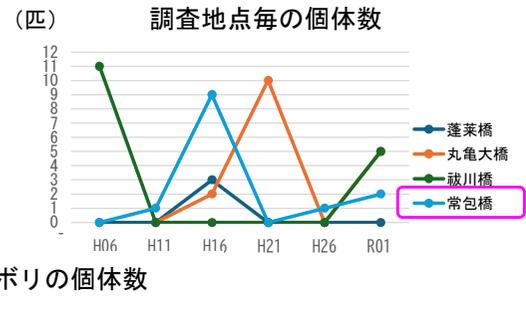
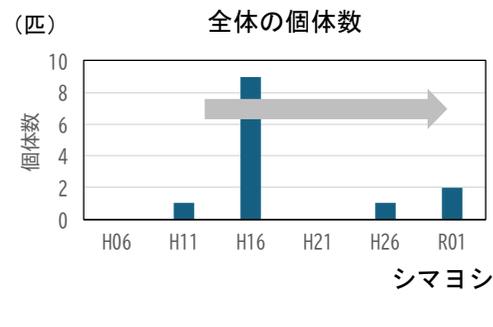
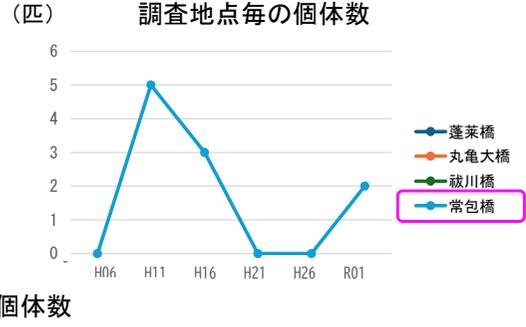
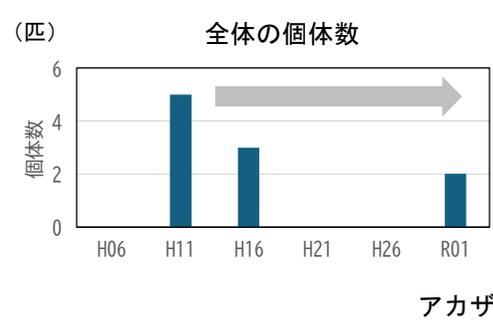
※鳥類の河川水辺の国勢調査のマニュアル改定に伴い、H19以降は調査方法が異なる。

※河川水辺の国勢調査、河川環境管理シートより、直近10年間の変化を整理。

※土器川河口部の鳥類の確認数は、河川水辺の国勢調査における2.0k～17.0k内の調査地区で確認された個体数の合計。

○土器川中流部（17.0k～18.85k）では、岩河床に設置された固定堰の湛水域が古くから安定して存在し、早瀬（水域）の面積に大きな変化はなく、アカザ、シマヨシノボリ、オオヨシノボリ、サワガニの個体数は概ね横ばい傾向である。
 ○シマヨシノボリの個体数が少ないが、近縁種のカワヨシノボリの個体数は概ね横ばい傾向である。

土器川中流部に生息する種と早瀬面積の経年変化



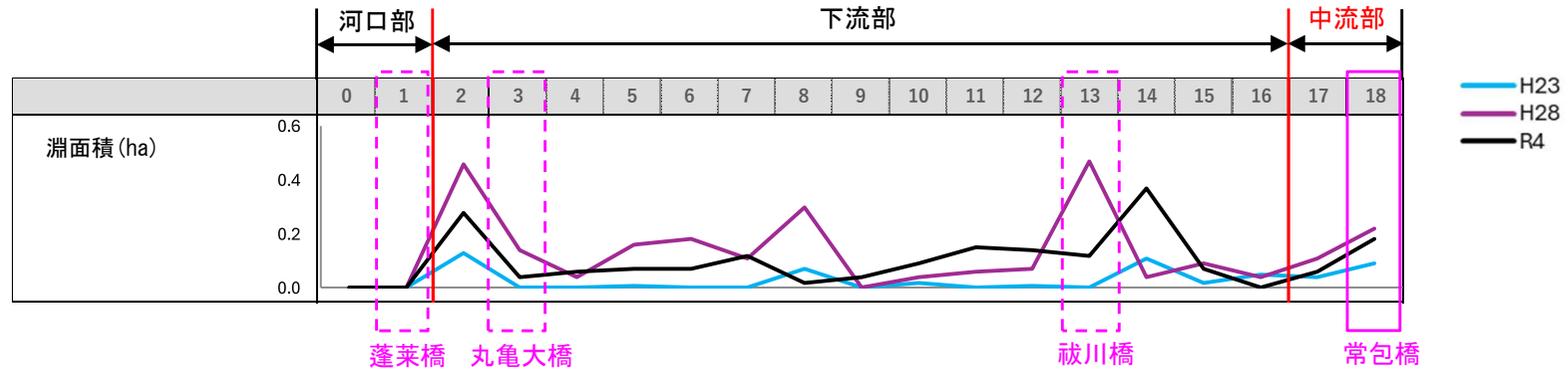
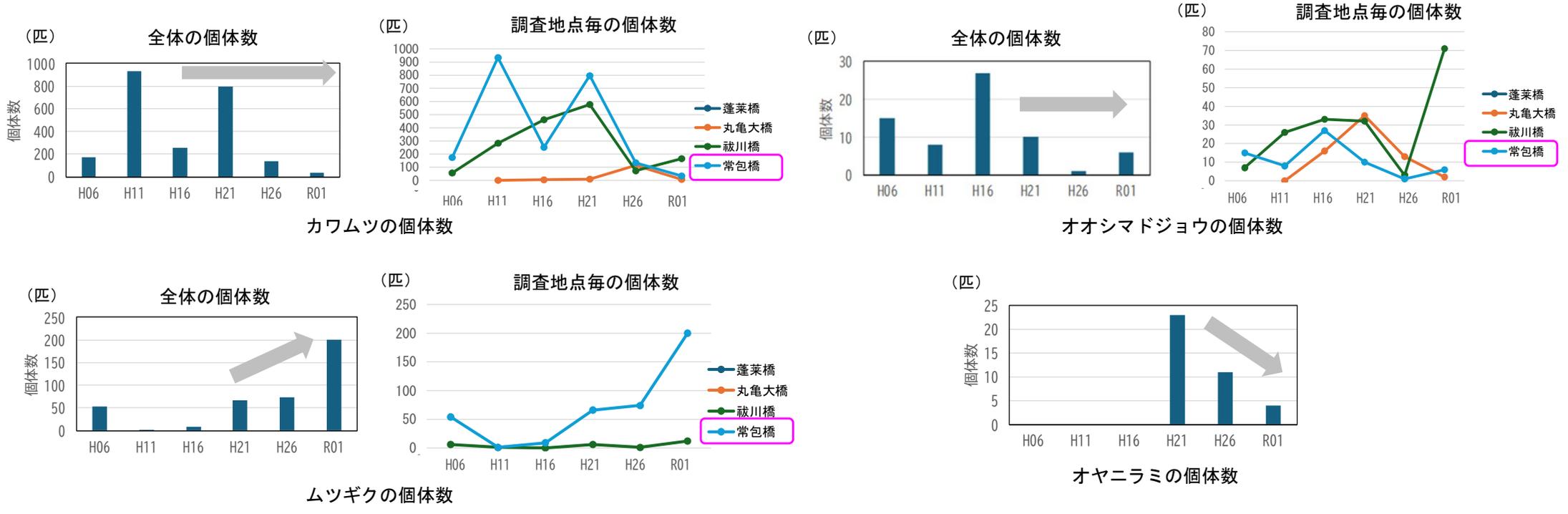
※河川水辺の国勢調査、河川環境管理シートより、直近10年間の変化を整理。

※土器川中流部の魚類の確認数は、河川水辺の国勢調査における常包橋地点で確認された個体数の合計。

※中流部の早瀬の面積は、大きな変化は見られない。

○土器川中流部（17.0k~18.85k）では、岩河床に設置された固定堰の湛水域が古くから安定して存在し、淵の面積に大きな変化はなく、オオシマドジョウ、カワムツの個体数は概ね横ばい傾向で、ムギツクは増加傾向であるものの、オヤニラミは減少傾向である。

土器川中流部に生息する種と淵面積の経年変化



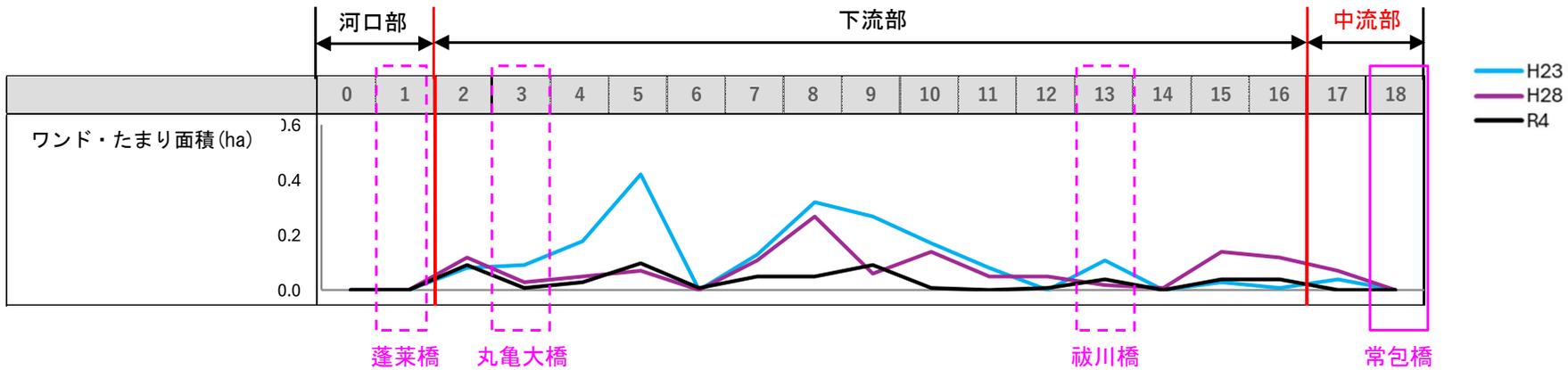
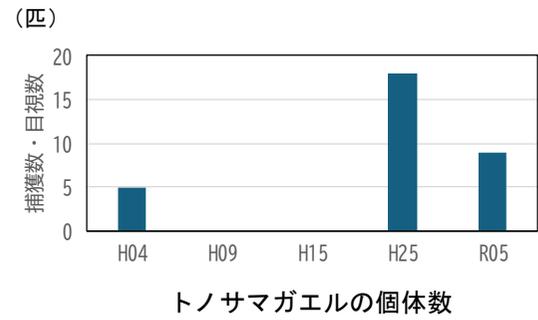
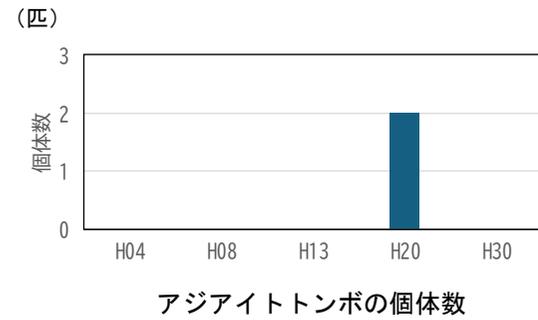
※中流部の淵の面積は、大きな変化は見られない。

※河川水辺の国勢調査、河川環境管理シートより、直近10年間の変化を整理。

※土器川中流部の魚類の確認数は、河川水辺の国勢調査における常包橋地点で確認された個体数の合計。

○土器川中流部（17.0k～18.85k）では、岩河床に設置された固定堰の湛水域と複雑な水際が形成されており、平成20年度にアジアイトトンボが確認され、トノサマガエルの個体数は概ね横ばい傾向である。

土器川中流部に生息する種とワンド・たまり面積の経年変化



※中流部にワンド・たまりは見られないが湛水域周辺に多様な水際が形成されている。

※河川水辺の国勢調査、河川環境管理シートより、直近10年間の変化を整理。

※土器川中流部の昆虫類、両生類の確認数は、河川水辺の国勢調査における常包橋地点で確認された個体数の合計。

- 礫河原や交互砂州が形成され、流水が伏流するため年間通して瀬切れが頻発するものの、孤立淵（たまり）が点在して形成され、魚類等の貴重な水域となっており、孤立淵には、絶滅危惧種のチュウガタスジシマドジョウ、ミナミメダカ、オイカワ等の生息・繁殖の場となっている。
- 礫河原はイカルチドリの繁殖場となっている。

◆基本情報1：河川環境区分

距離標(空間単位:1km※)	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
略図														
河川環境区分	区分2													
河川区分	中下流域													
大セグメント区分	セグメント1													
小セグメント区分	1-③			1-②								1-①		
堤内地の景観 右岸側	住宅地	住宅地・農地							農地					
堤内地の景観 左岸側	住宅地	住宅地・農地							農地					
周辺の地形・地質	扇状地性低地													
河床勾配 (平均河床高)	1/380			1/220			1/150			1/100				
河床材料	砂泥・砂・礫			砂・礫										
川幅 (河道幅・水面幅)														
横断工作物	●土器川潮止堰 ●古子川 ●赤山川 ●谷川 ●次出水 ●集水井													
支川の合流	●古子川 ●赤山川 ●谷川													
特徴的な狭窄部														
自然再生														

◆基本情報2-1：生物の生息場の分布状況

距離標(空間単位:1km)	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
陸域	1. 低・中草草地	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
水際域	2. 河辺性の樹林・河畔林	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△
水域	3. 自然裸地				△	○						△		
水際域	4. 外来植物生育地	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
水際域	5. 水生植物帯				△									○
水際域	6. 水際自然度	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△
水際域	7. 水際の複雑さ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
水域	8. 連続する瀬と淵	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○
水域	9. ワンド・たまり	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○
水域	10. 湛水域	×										△		×
汽水	11. 干潟	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
汽水	12. ヨシ原	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
特殊性	礫河原の植生域					○					○			○
特殊性	湧水地													
特殊性	海浜植生帯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
特殊性	塩沼湿地	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
生息場の多様性の評価値	4	3	2	4	0	5	4	5	2	1	2	3	2	2

a) 生息場の多様性の評価(大セグメントの中央値に基づき評価)

距離標(空間単位:1km)	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
大セグメント区分	セグメント1													
河川環境区分	区分2													
陸域	1. 低・中草草地	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
陸域	2. 河辺性の樹林・河畔林	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△
陸域	3. 自然裸地	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△
陸域	4. 外来植物生育地	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
水際域	5. 水生植物帯	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
水際域	6. 水際自然度	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△
水際域	7. 水際の複雑さ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
水域	8. 連続する瀬と淵	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○
水域	9. ワンド・たまり	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○
水域	10. 湛水域	×										△		×
汽水	11. 干潟	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
汽水	12. ヨシ原	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
生息場の多様性の評価値	4	3	2	4	0	5	5	5	3	2	3	2	2	2

b) 生物との関わりの強さの評価

距離標(空間単位:1km)	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	
大セグメント区分	セグメント1														
河川環境区分	区分2														
重要種数	魚類(H31)			5									5		
重要種数	底生動物(R2)												7		
重要種数	植物(H24)	4	4									4	4		
重要種数	鳥類(H29)	2	2	0	0	1	1	3	3	3	2	3	0	2	
重要種数	両・爬・哺(H25)												3		
重要種数	陸上昆虫類(H30)												9		
重要種数	重要種全体合計	6	11	0	0	1	1	3	3	3	2	7	28	2	
特徴づける種(注目種)の個体数と依存する生息場の	ミナミメダカ	207													
特徴づける種(注目種)の個体数と依存する生息場の	ワンド・たまり	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○	
特徴づける種(注目種)の個体数と依存する生息場の	イカルチドリ	2	0	0	0	1	2	2	5	3	2	1	0	1	
特徴づける種(注目種)の個体数と依存する生息場の	自然裸地	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○	
生物との関わりの強さに関するコメント	魚類: 河川整備計画に従い選定 鳥類: 河川整備計画に従い選定 自然裸地とワンド・たまりに着目。														
※河川水辺の国勢調査で確認された重要種数、個体数を示す。															
生物との関わりの強さの評価値	2	0	0	1	1	2	2	1	0	0	1	0	1	1	

c) 代表区間の選定

距離標(空間単位:1km)	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
河川環境区分	区分2													
生息場の多様性の評価値	4	3	2	4	0	5	5	5	3	2	3	2	2	2
生物との関わりの強さの評価値	2	0	0	1	1	2	2	1	0	0	1	0	1	1
代表区間候補の抽出	A		B	B	A	A					B		B	
候補の抽出理由	A: 評価値のどちらかが上位 B: 評価値のどちらかが上位以内 A及びB評価を候補とし、選定した。													
橋の有無	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
代表区間の選定結果	★													

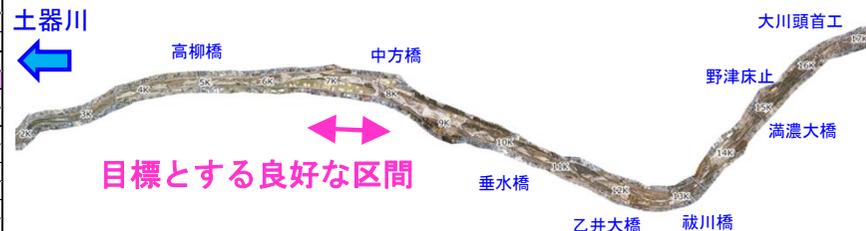
区分2での評価値が高く、自然裸地のたまり（孤立淵）が形成され、「水際自然度」の評価が高いため、代表区間として選定

河川環境の現状

- 礫河原や交互砂州が形成され、流水が伏流するため瀬切れが頻発するものの孤立淵が形成され、絶滅危惧種のチュウガタスジシマドジョウ、ミナミメダカ、オイカワ等の生息・繁殖の場となっている。
- 礫河原はイカルチドリの繁殖場となっている。

環境の保全・創出の方針

- 瀬切れが頻発する下流部では、絶滅危惧種のチュウガタスジシマドジョウ、ミナミメダカ等の生息・繁殖の孤立淵等の貴重な水域を保全する。
- イカルチドリの繁殖場である礫河原を保全する。



チュウガタスジシマドジョウ



ミナミメダカ



イカルチドリ

- 掘込河道区間で、河床に露出した岩河床に取水固定堰が設置されているため、常時水域が維持され、多様な動植物の生息・生育・繁殖環境となっている。
- 水際の湿性には、カワデシヤ、サワガニ、アジアイトトンボなどが見られ、水域では、カワムツ、タモロコ、アカザなどの淡水魚や、シマヨシノボリ、オオヨシノボリなどの回遊魚が見られる。緩流域では、オオシマドジョウやムギツクなども確認されている。

◆基本情報1：河川環境区分

距離標(空間単位:1km)	16	17	18
※距離標1:1~2km区間			
略図			
河川環境区分	区分3		
河川区分	上流域		
大セグメント区分	セグメントM		
小セグメント区分	M		
堤内地の景観 右岸側	農地		
堤内地の景観 左岸側	農地		
周辺の地形・地質	扇状地(旧瀬原性低地)		
河床勾配(平均河床高)	1/100		
河床材料	砂・礫 礫・岩河床・巨石		
川幅(河道幅・水面幅)			
横断工作物	●大川頭首工 ●百野用水弁堤 ●奥志面弁堤 ●片岡上所堤 ●大川		
支川の合流	●大川		
特徴的な狭窄部	目標とする良好な区間		
自然再生課題:			

◆基本情報2-1：生物の生息場の分布状況

距離標(空間単位:1km)	16	17	18
1. 低・中葦草地	-	-	-
2. 河辺性の樹林・河畔林	○	○	○
3. 自然裸地	△	△	○
4. 外来植物生育地	-	-	-
5. 水生植物帯	-	-	-
6. 水際自然度	○	△	○
7. 水際の複雑さ	○	○	○
8. 連続する瀬と淵	-	△	○
9. ワンド・たまり	-	-	-
10. 潜水域	△	×	△
11. 干潟	-	-	-
12. ヨシ原	-	-	-
礫河原の植生域	○	○	○
湧水地	-	-	-
海浜植生帯	-	-	-
塩沼湿地	-	-	-
生息場の多様性の評価値	3	1	5

注) 生息場の多様性の評価値は、全川の中央値を基準として陸域・水際部・水域の物理環境を○・△・×で評価し、○の数から×の数を差し引いた数値。

a) 生息場の多様性の評価

距離標(空間単位:1km)	16	17	18
大セグメント区分	セグメントM		
河川環境区分	区分3		
陸域	1. 低・中葦草地	-	-
	2. 河辺性の樹林・河畔林	○	△
	3. 自然裸地	○	△
	4. 外来植物生育地	-	-
水際域	5. 水生植物帯	-	-
	6. 水際自然度	○	○
	7. 水際の複雑さ	○	○
水域	8. 連続する瀬と淵	-	△
	9. ワンド・たまり	-	-
	10. 潜水域	△	△
汽水	11. 干潟	-	-
淡水	12. ヨシ原	-	-
生息場の多様性の評価値	4	1	4

b) 生物との関わりの強さの評価

距離標(空間単位:1km)	16	17	18	
大セグメント区分	セグメントM			
河川環境区分	区分3			
重要種数	魚類(H31)	-	6	
	底生動物(R2)	-	4	
	植物(H24)	-	1	
	鳥類(H29)	1	1	
	両・爬・哺乳(H25)	-	3	
	陸上昆虫類(H30)	-	10	
	重要種全体合計	1	1	24
特徴づける種(注目種)の個体数と依存する生息場	アカザ	-	2	
	連続する瀬と淵	△	○	
生物との関わりの強さの評価値	0	0	1	
生物との関わりの強さに関するコメント	魚類: 河川整備計画に選定された種、鳥類: 河川整備計画に選定された種、連続する瀬と淵と鳥類: 注目種。			
※河川水際の国勢調査で確認された重要種数、個体数を示す。				

c) 代表区間の選定

距離標(空間単位:1km)	16	17	18
河川環境区分	区分3		
生息場の多様性の評価値	4	1	4
生物との関わりの強さの評価値	0	0	1
代表区間候補の抽出	B	-	A
候補の抽出理由	A: 評価値のどちらかが1位		
橋の有無	○	○	○
代表区間の選定結果	★		

区分3での評価値が高く、常時水域が維持される淵が形成され、多種多様な動植物が確認できるため、代表区間として選定

河川環境の現状

- 河床には岩が露出し常時水域が維持され、多様な動植物の生息・生育・繁殖環境となっている。
- 水際の湿性には、カワデシヤ、サワガニ、アジアイトトンボなどが見られる。
- 水域では、カワムツ、タモロコ、カマツカ、オイカワ、アカザなどの淡水魚や、シマヨシノボリ、オオヨシノボリなどの回遊魚が見られる。緩流域では、オオシマドジョウやムギツクなども確認されている。

環境の保全・創出の方針

- カワムツ、シマヨシノボリ、アカザ等の生息場である常時水域や、サワガニ、アジアイトトンボ等が生息する岩河床の水辺環境を保全する。



サワガニ



アジアイトトンボ



アカザ

河川名	本文（一部抜粋）	区分	分類	種名	環境省RL※ 1	香川県RDB ※2	根拠資料	
土器川	源流から天川頭首工までの上流部は、讃岐山脈の深い侵食谷が形成された山地渓谷の景観を呈しており、美霞洞渓谷等の景勝地が見られる。山地部の県境付近は、大滝大川県立自然公園に指定されており、クヌギ・コナラ群落、アカマツ群落およびスギ・ヒノキの植林が広がっている。渓流域には、ナガレホトケドジョウやアカザ等の魚類、イシツチサンショウウオ等の両生類、ヤマセミ、カワガラス等の鳥類が生息している。	上流部	植物	クヌギ・コナラ群落			第5回自然環境保全基礎調査（植生調査）（環境庁、平成11年）	
				スギ・ヒノキ植林			第5回自然環境保全基礎調査（植生調査）（環境庁、平成11年）	
			魚類	アカマツ群落			第5回自然環境保全基礎調査（植生調査）（環境庁、平成11年）	
				ナガレホトケドジョウ	EN	CR+EN	漁協への聞き取り（平成6年度）	
			アカザ	VU	CR+EN	香川県レッドデータブック2004		
	両生類	イシツチサンショウウオ	NT	VU	河川水辺の国勢調査H7			
	鳥類	ヤマセミ		CR+EN	香川県レッドデータブック2004			
		カワガラス		NT	香川県レッドデータブック2021			
	天川頭首工から大川頭首工までの中流部は、河川沿いに谷底平野が形成され、河岸段丘の河床には岩が露出し、取水井堰が多数存在する。河岸にはアキニレ群落、センダン群落等の木本類やクス群落、水際の湿性にはカワデシヤなどの植物がみられる。魚類ではカワムツ、オイカワ、アカザ等の淡水魚や、シマヨシノボリ、オオヨシノボリなどの回遊魚がみられ、緩流域ではオオシマドジョウやムギツクなどが生息している。流れのある水際には、サワガニ等の底生動物がみられ、河岸の窪地の水たまりは、アジアイトトンボ等の昆虫類の生息場所やトノサマガエル等の両生類の産卵場所となっており、多様な動植物の生息・生育・繁殖する河川環境となっている。	中流部	植物	アキニレ群落			河川水辺の国勢調査H18、H23、H28、R4	
				センダン群落			河川水辺の国勢調査H18、H23、H28	
				クス群落			河川水辺の国勢調査H18、H23、H28、R4	
				カワデシヤ	NT	NT	河川水辺の国勢調査H5、H10、H14、H24、R3	
			底生動物	サワガニ		NT	河川水辺の国勢調査H6、H11、H17、H22、H27	
			昆虫類	アジアイトトンボ		VU	河川水辺の国勢調査H8、H13、H20、H30	
			魚類	カワムツ			河川水辺の国勢調査H6、H11、H16、H21、H26、R1	
				オイカワ			河川水辺の国勢調査H6、H11、H16、H21、H26、R1	
				アカザ	VU	CR+EN	河川水辺の国勢調査H11、H16、R1	
				シマヨシノボリ			河川水辺の国勢調査H11、H16、H26、R1	
				オオヨシノボリ		VU	河川水辺の国勢調査H6、H11、H16、H21、H26、R1	
	両生類	オオシマドジョウ		NT	河川水辺の国勢調査H6、H11、H16、H21、H26、R1			
		ムギツク		VU	河川水辺の国勢調査H6、H11、H16、H21、H26、R1			
		トノサマガエル	NT	NT	河川水辺の国勢調査H4、H25、R5			
	大川頭首工から潮止堰までの下流部は、扇状地河川となり川幅も広く開放的で、沿川には水田などの耕作地が広がるのどかな田園河川の景観をなしている。一方、土器川は降水量が少なく急流な扇状地河川であることから、祓川橋下流では、表流水が伏没する瀬切れが古くから発生している。特に中方橋～高柳橋間では、現在も一年の半分以上の期間で瀬切れが発生している。表流水の少ない河床にはレキ河原が広がり、水際にはイヌハギやカワラケツメイ等が広範囲に多く見られ、鳥類ではイカルチドリ等の繁殖場となっている。魚類ではカワムツ、オイカワ等の淡水魚がみられ、淵や緩流域ではチュウガタスジシマドジョウやミナミメダカが生息している。このような水の少ない河川環境のなかでも、それに適応した生物の生息環境が古くよりみられる。	下流部	植物	イヌハギ	NT	NT	河川水辺の国勢調査H5、H10、H14、H24、R3	
				カワラケツメイ			VU	河川水辺の国勢調査H5、H10、H14
			鳥類	イカルチドリ			NT	河川水辺の国勢調査H7、H12、H19、H29
			魚類	カワムツ				河川水辺の国勢調査H6、H11、H16、H21、H26、R1
				オイカワ				河川水辺の国勢調査H6、H11、H16、H21、H26、R1
ミナミメダカ				VU	VU		河川水辺の国勢調査H11、H16、H21、H26、R1	
チュウガタスジシマドジョウ				VU	VU		河川水辺の国勢調査H11、H16、H21、H26、R1	
潮止堰から河口までの河口部は、干潟が形成され、トビハゼ、ミナミメダカ、ヒイラギ等の汽水・海水域に生息する魚類、ハクセンシオマネキ等のカニ類及びフトヘナタリガイ等の貝類などの干潟特有の種がみられる。また、干潟はチュウシャクシギやシロチドリなどのシギ・チドリ類の採餌場となっており、潮間帯の河岸にはヨシ原がみられ、オオヨシキリの採餌場となっている。また、ヨシ群落の中には、ハマサジ、ハマツツナなどがみられる。			河口部	植物	ハマサジ	NT	NT	河川水辺の国勢調査H5、H10、H14、H24、R3
	ハマツツナ					NT	河川水辺の国勢調査H10、H14、H24、R3	
	底生動物	フトヘナタリガイ		NT	NT		河川水辺の国勢調査H11、H17、H22、H27、R2	
		ハクセンシオマネキ		VU	NT		河川水辺の国勢調査H11、H17、H22、H27、R2	
	鳥類	チュウシャクシギ					河川水辺の国勢調査H7、H12、H29	
		シロチドリ		VU	NT		河川水辺の国勢調査H7、H12、H29	
		オオヨシキリ					河川水辺の国勢調査H7、H12、H19	
魚類	トビハゼ	NT	VU		河川水辺の国勢調査H11、H16、H21、H26、R1			
	ヒイラギ				河川水辺の国勢調査H6、H11、H16、H21、H26、R1			
	ミナミメダカ	VU	VU		河川水辺の国勢調査H6、H11、H16、H21、H26、R1			

河川水辺の国勢調査で確認されていない場合のみ他の文献を記載している。

※1 環境省RL：（植物以外）環境省レッドリスト2020（令和2年3月） （植物）環境省レッドリスト2024（令和7年3月）

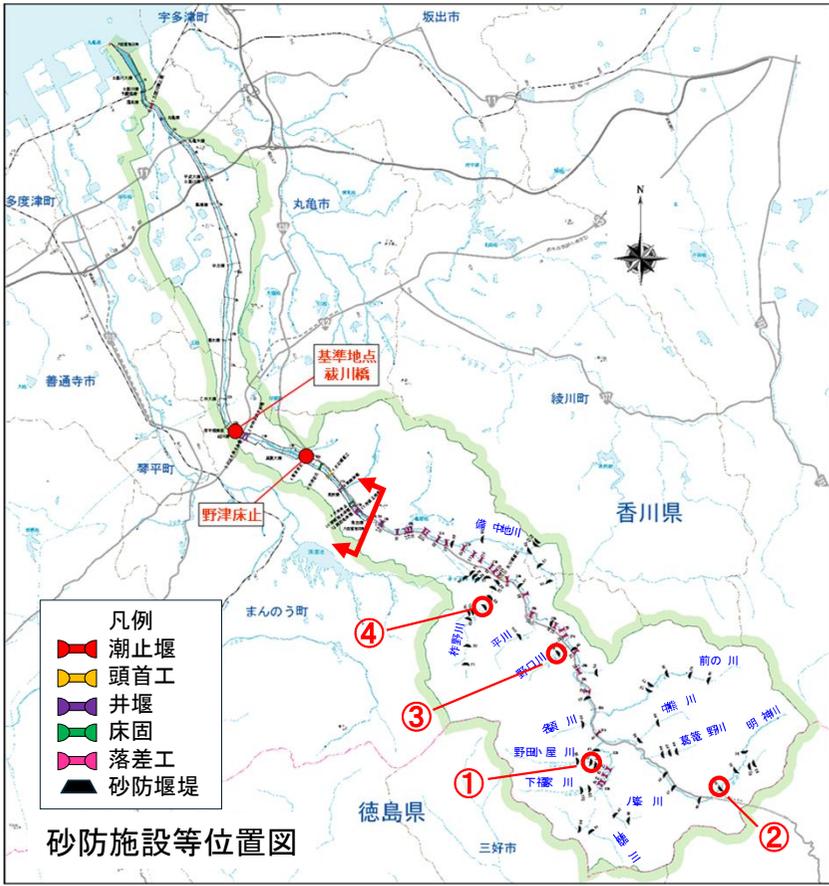
EX:絶滅 EW:野生絶滅 CR+EN:絶滅危惧I類 CR:絶滅危惧IIA類 EN:絶滅危惧IB類 VU:絶滅危惧II類 NT:準絶滅危惧 DD:情報不足 LP:絶滅のおそれのある地域個体群

※2 香川県RDB：香川県レッドデータブック2021 香川県の希少野生生物（令和3年3月）

EX:絶滅 EW:野生絶滅 CR+EN:絶滅危惧I類 CR:絶滅危惧IIA類 EN:絶滅危惧IB類 VU:絶滅危惧II類 NT:準絶滅危惧 DD:情報不足

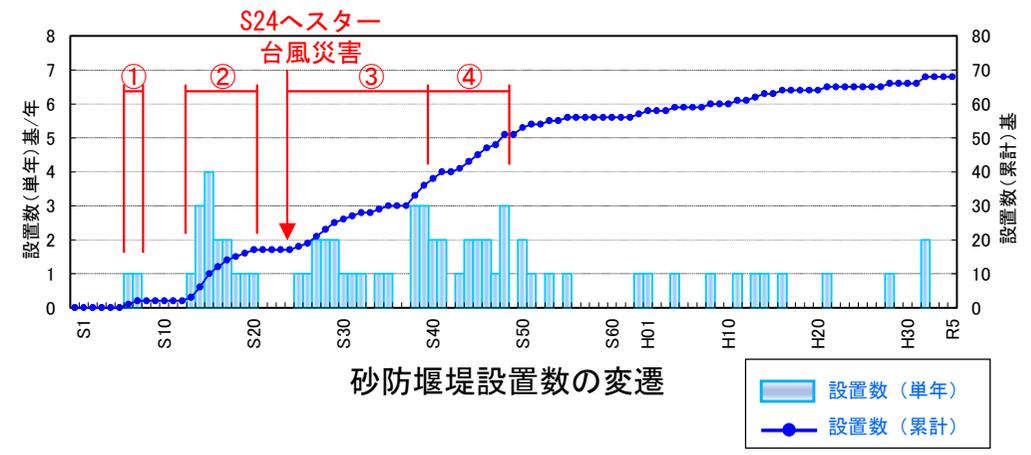
⑥総合的な土砂管理

○昭和初期の土器川は、天井川といわれるほど河床が高く、昭和の初めから、香川県により砂防堰堤が整備されている。
 ○砂防堰堤は、現在約60基以上が整備され、土砂災害防止のため、香川県において引き続き砂防施設の整備が実施されている。



＜砂防施設の整備経緯＞

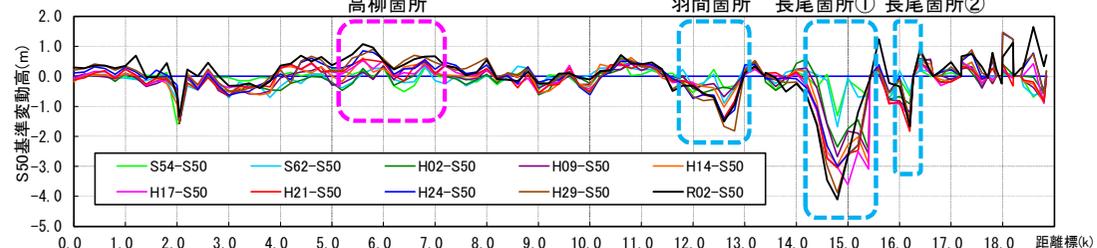
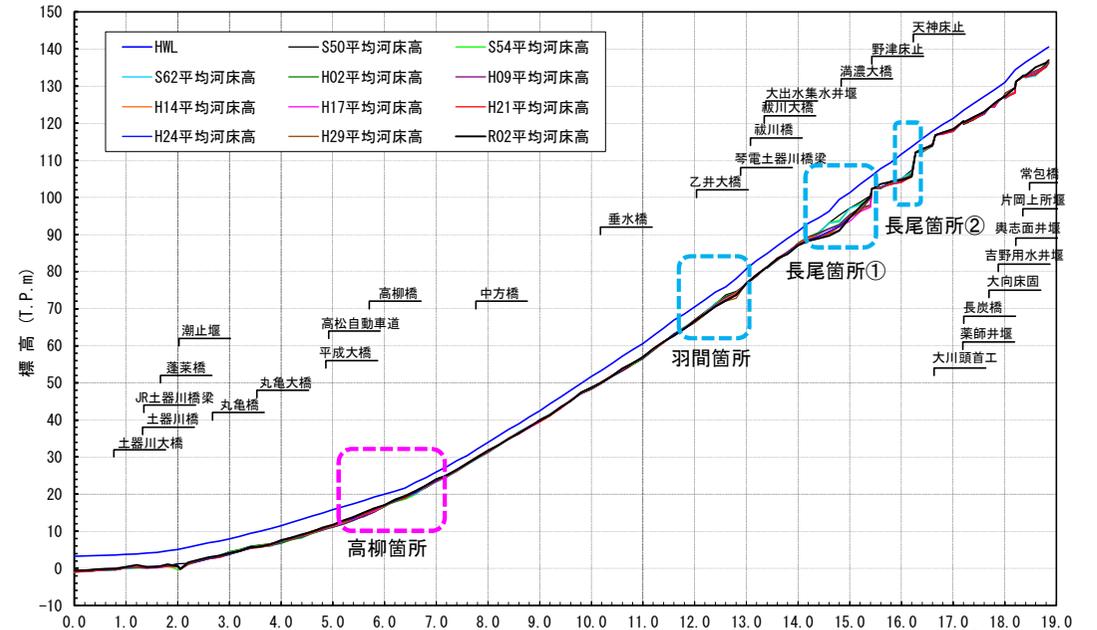
- ① 昭和初期頃の国策の農村振興土木事業の一環として、砂防事業を実施。
- ② その後、崩壊地を流域に持つ香川県内河川として、土器川を含む河川流域において、治山目的の山腹工から溪流工に工事内容が移行したため、砂防施設整備がさらに推進。
- ③ 戦後では、昭和24年のヘスター台風による大災害を受けた香川県による河川改修事業の着手をきっかけに、山地領域における砂防事業についても整備を推進。
- ④ 昭和40年代では、全国各地に頻発した土石流災害に対応するため、全国的な土石流対策砂防の推進を受けて、土器川流域でも大型砂防堰堤等の整備を推進。
- ⑤ 建設年代が古い砂防施設は、概ね満砂状態となっており、近年に大規模な山腹崩壊の発生もないため、砂防施設状況に大きな変化はなく、上流域からの土砂供給は概ね安定傾向と推定。



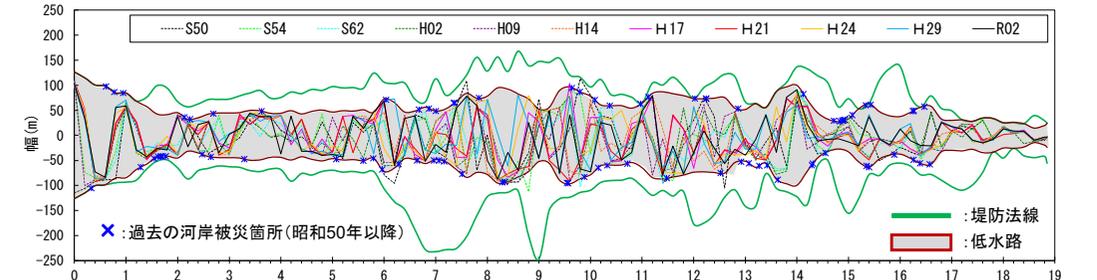
上流域の砂防施設状況

○土器川の大正管理区間では、高度経済成長期の昭和30年代～昭和40年代に本格的な砂利採取により、河床低下が進行したため、昭和42年に砂利採取を全面禁止した。

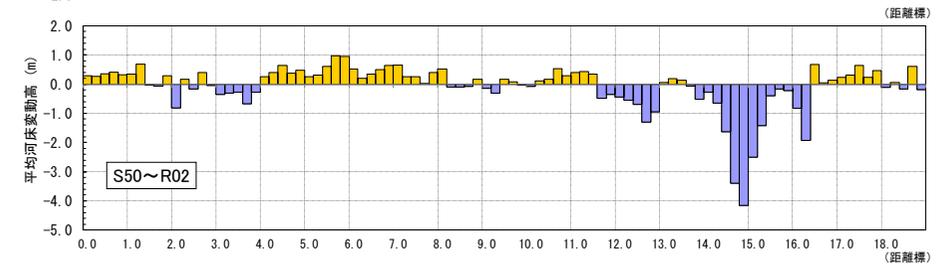
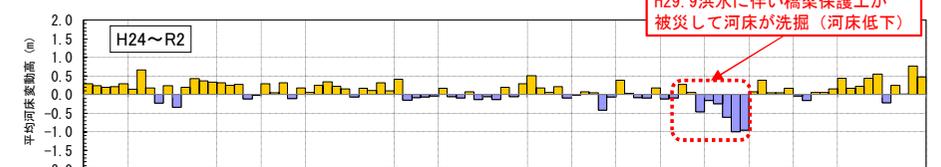
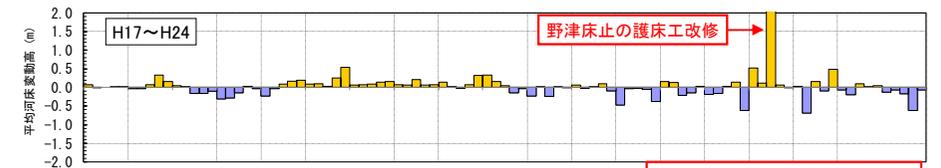
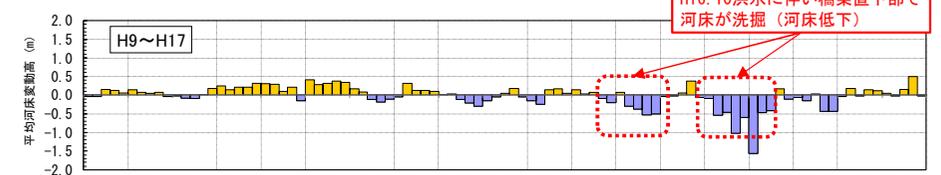
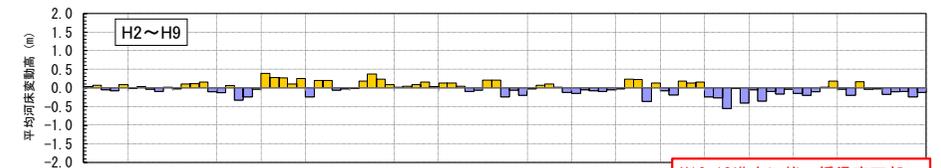
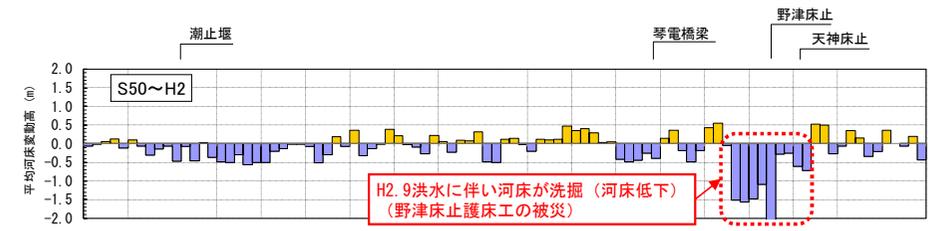
○昭和50年頃以降は、局所的には大規模な出水時に床止めや橋梁直下部での河床低下の進行や、河床勾配変化点での慢性的な土砂堆積などの河道管理における課題が見られ、河床整正や樹木伐採などの継続した対策を実施しているが、全体的に河床は安定傾向にある。



平均河床高の経年変化縦断図（昭和50年～令和2年）



最深河床位置の経年変化縦断図（昭和50年～令和2年）



河床変動高の経年変化縦断図（昭和50年～令和2年）

○河口領域では、昭和50年代に、左岸側が埋め立てにより河口部が沖合に延伸しているが、顕著な河口砂州の堆積は見られず、河床は安定傾向にある。
 ○海岸領域では、埋め立て等により海岸部が形成されており、過去から砂浜を有する汀線はない状況である。



S23撮影



S50撮影

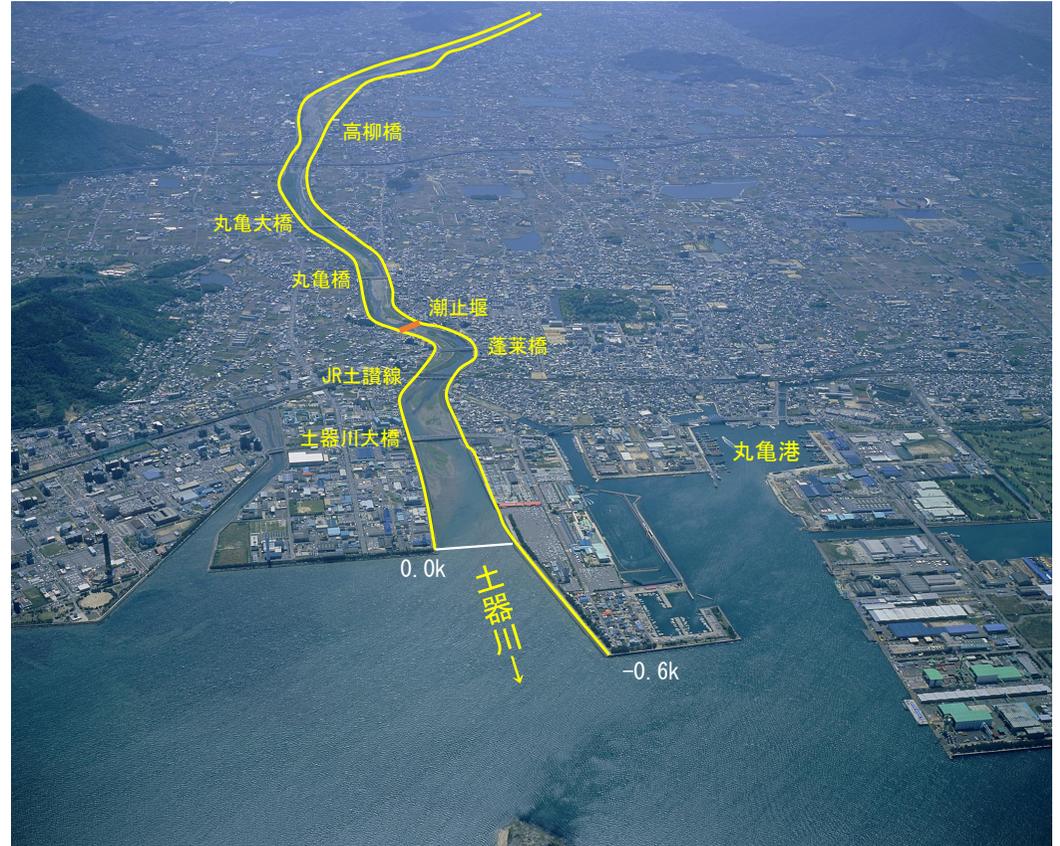


S52撮影

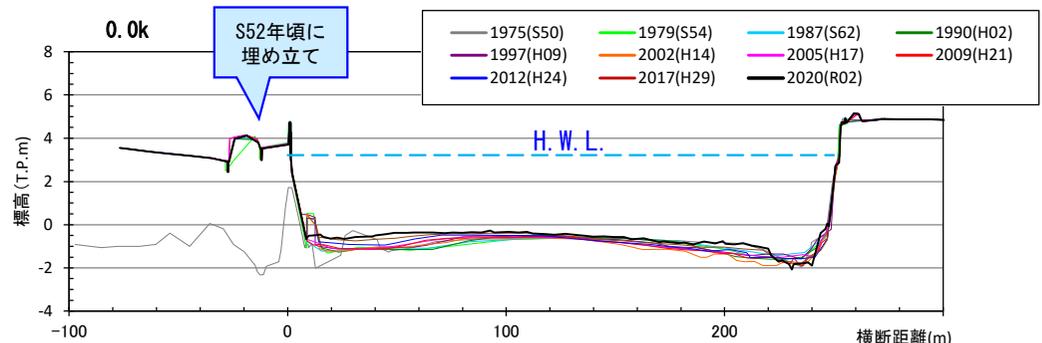


R2撮影

河口部の変遷



土器川の海岸部の状況



土器川河口 (0.0k) 経年変化横断面図